

シアトルにおける 初期チャイナタウンの形成とその変容

杉 浦 直

- I. はじめに — 目的と研究方法 —
- II. 中国人の登場とチャイナタウン
- III. 反中国人暴動 (1886年) とチャイナタウン
- IV. 大火後の復興と「南ワシントン通りチャイナタウン」の形成
- V. 中国系施設の移動と「南キング通りチャイナタウン」の形成
- VI. おわりに

I. はじめに — 目的と研究方法 —

本論文は、アメリカ北西部海岸の都市シアトルにおける初期チャイナタウンの形成と変容を歴史地理学的な視点から検討したものである。チャイナタウンは、海外の都市において中国人 (海外在住中国人, 華人) が形成した商業・業務地区であり、東南アジアや欧米の主要都市において広く見られるため、エスニック・タウンの一つの典型としてよく知られている¹⁾。海外への中国人移民の大量流出はアヘン戦争以降の19世紀中葉から始まったため、チャイナタウンの歴史は古く、エスニック・マイノリティの活動空間として多くの国で注目される特色のある存在であった。チャイナタウンを知るとは海外における中国系移民社会を知るためのみならず、エスニック都市空間 (特にエスニック・タウン)

の形成と変容を考えるための貴重な手掛かりを提供する。

シアトルのチャイナタウンは、都心地区 (ダウントウン) の東南縁に位置するいわゆる「インターナショナル地区 (International District)」 (以下, ID) に在り、特にインターステート・ハイウェイ5号線 (I-5) の西側地区、南キング通り (South King Street) を軸とする地域には中国系営業施設が密集している (図1, 参照)。サンフランシスコやニューヨークにおけるものほど大規模ではないが、アメリカのなかでも強い持続性をもって今日まで存続してきたチャイナタウンの一つと言えよう。しかし、このシアトルのチャイナタウンは形成の初期からこの位置にあったわけではない。19世紀末ごろから20世紀初頭にかけてのチャイナタウンあるいは中国人²⁾ 居住地区は今のIDより西側の海岸寄り、現在のパイオニア・スクエア (Pioneer Square) 内に位置していたことが従来の研究によって知られている。以下、この初期のチャイナタウンとそこからの移動について記述した主要な先行研究文献を見ておく。

シアトルにおける中国人の居住展開を本格的に論じた比較的早い時期の論考としてはチンらの著作³⁾ があり、「最初の集落としての中国人居住区 (Chinese sector)」が現在パイオニア・スクエアと称されているシアトルで

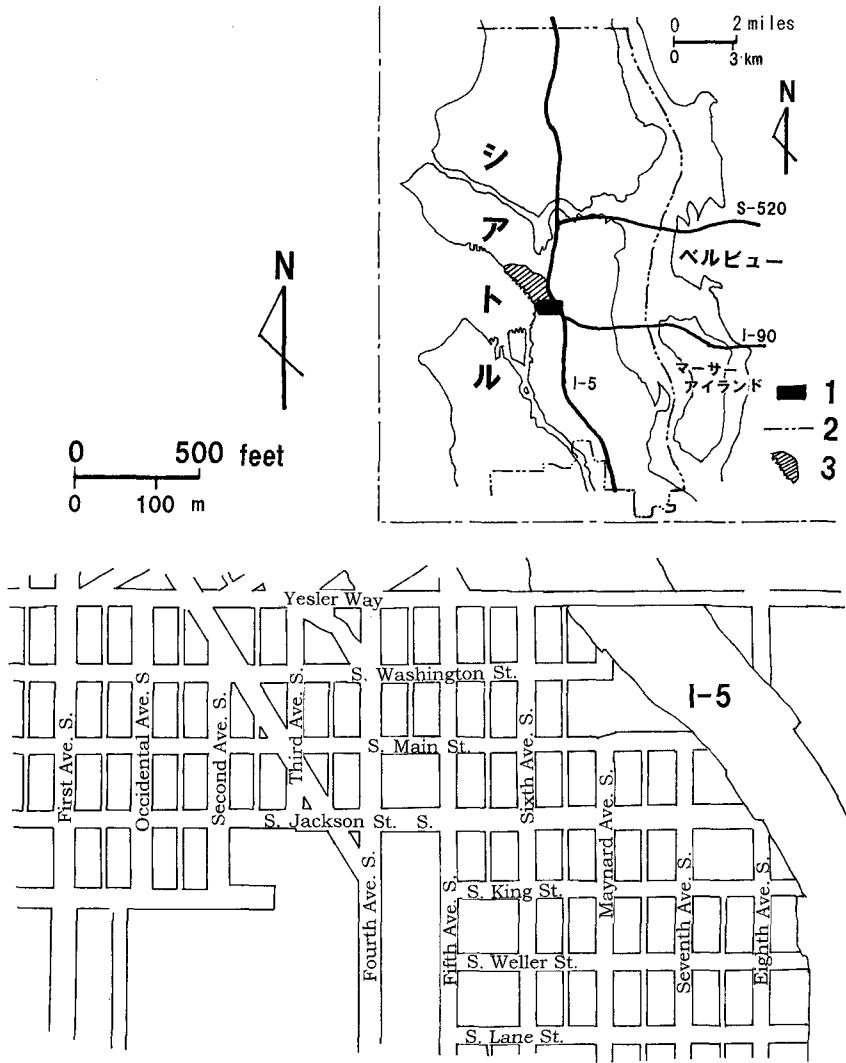


図1 研究対象地域の位置と概況

- 1: 研究対象地域 (下の拡大図の範囲) 2: シアトル市境界 3: ダウンタウンの範囲 (概略)
 I-5: インターステート・ハイウェイ5号線 I-90: インターステート・ハイウェイ90号線
 S-520: ステート・ハイウェイ520号線 街路名のS.はSouth (以下の図, 同)

もっとも早く市街地化した海岸近くの一区域に発達したこと、1890年代から南ワシントン通り (S. Washington St.) 沿いに「最初のチャイナタウン」が形成されたこと、1910年前後から主要な中国系商店が現ID内に移動し「二番目のチャイナタウン」が形成されて

いったことなどを明らかにした。この見解は、シアトルにおけるアジア系移民の展開と役割に焦点をあてつつIDの歴史を論じたチンとバッチャョの一連の論考⁴⁾、さらにこの著者の一人チンによる最近の著作⁵⁾においても基本的には踏襲されたが、この後の2つの文

献では比較的早い段階で中国人居住区が徐々に南ワシントン通り沿い(二番街南Second Avenue South～三番街南Third Avenue S.)に移ってきたことも指摘されている⁶⁾。この他、ワシントン州における中国人移民の歴史を叙述したヒルデブランドの著作⁷⁾や同じくワシントン州におけるアジア系及び太平洋諸島系各移民集団の歴史を論じたタカミの論考⁸⁾でも、シアトルにおける初期のチャイナタウンについての記述が見られるが、いずれも基本的にチンらの著作に拠ったものである。以上のようにチンらを中心に初期チャイナタウンに関する知見が集積されてきたが、歴史地理学的な見地からはチャイナタウンの正確な位置、その商店数から見た規模や内部構成、その詳しい移動過程や時期などについて不明確な点も多い。なお、初期チャイナタウンの位置を地図で表現した文献として上記チンらの1973年著作⁹⁾とワシントン大学都市計画科の1987年修士論文¹⁰⁾があるが、いずれも略図の域を出ないきわめて概略的なものである。

そこで、本研究では上記先行研究の記述を参照しつつ、このシアトルのチャイナタウンに関し、移住初期から20世紀初頭におけるその位置と構成をより詳しく検討し、その形成と成長・変容を中国社会の展開・変容と絡めつつ改めて考察することを試みた。その際、商業・業務施設やコミュニティ施設の所在を個別に示す資料(市民住所録類)を使用して従来の知見より精密に施設の分布を復原し、初期チャイナタウンの正確な位置と構造を実証的に明らかにした。言わば、チャイナタウンの生成の歴史を地理学的視点からたどろうとするものであり、従来の歴史叙述を中心とした諸研究により具体的な空間的情報を付加して、シアトル・チャイナタウンの歴史を再構成しようとした試みである。

エスニック・ビジネスの立地を実証的に明らかにし地図化することを可能にする資料と

しては、一般に当該エスニック集団のコミュニティ団体やエスニック系新聞社などが発刊するエスニック・コミュニティ名簿(住所録、電話帳)が使われる。特にアメリカにおける日系人の場合、その主要な居住地となった都市ごとに詳細なコミュニティ名簿が出版されており、日系営業施設の構成とその立地(住所)を具体的に把握できる。筆者もこうした住所録類を利用して、シアトルにおける日系営業施設の構成と分布を把握し、日系コミュニティの空間的展開の過程を明らかにした¹¹⁾。しかし、アメリカにおける中国人の場合、第二次世界大戦前は人口が少なかったせいもあり、こうした住所録類の整備は一般にきわめて不十分である。早い時期のものとして、ウォン・キン(Wong Kin)が編纂した『国際中国人ビジネス住所録1913年(International Chinese Business Directory of the World for the Year 1913)』があるが、網羅度の上で不十分であると予想されるほか、シアトルの初期チャイナタウンの状況を知るには年次がやや新しく、また単年度なので年次間の比較もできない。そこで、本研究では1889年から毎年出版されているシアトルのもっとも基本的で詳細な市民名簿である『ポーク社シアトル市民住所録(Polk's Seattle City Directory)』を使用することにした。しかし、これのみでは19世紀後半、特に後述する反中国人暴動(1886年)の前の状況を復原することはできない。幸い、ワシントン大学の文書館(「北西部特別コレクションズ」)には、ポーク社のもの以外にいくつかのより古い単発的な市民住所録ないし営業者住所録が残されている。ここでは、そのなかから年次と精度を考慮して目的に適合した5時点の住所録を前記ポーク社の市民住所録に加えて使用することにした¹²⁾。

問題は、どのように中国人による営業施設を的確に抽出するかということである。使用した住所録類は個人のほかに各種営業施設や

コミュニティ施設を含み、その網羅度は後者の方でより高いと思われる。また、個人名には多くその雇用先が記載されている。しかし、その施設がどのエスニック系列に属するかという情報はない。しかし、営業施設の場合、人名が冠されたカンパニー名が多く、またほとんどの場合にマネージャー名が記載されている。そこで、中国人の姓 (surname) を指標として中国系営業・コミュニティ施設を抽出することが可能である。しかしながら、日本人・日系人の場合と違い、中国人の姓をその英語表記 (アルファベット表記) から判別することは日本人研究者にとってかなり難しい。しかし、幸いなことにルーイーによる中国人のアメリカにおける姓の表記の仕方をまとめた著作があり、その末尾の付録にアメリカにおける中国人の通常の英語表記姓のほぼ包括的と思われるリストが記載されている¹³⁾。そこで、このリストを基本とし、それにシアトルの中国人についての文献から得た姓をいくつか追加して、あり得るアルファベット表記の中国人姓の一覧 (以下、「一覧」) を作成し、中国系の姓であるかどうかの判断基準とした。しかし、さらに問題もある。それは、同じアルファベット表記の姓で、中国人の姓にもヨーロッパ系人の姓にも共通して見られるものが少なからずある (例えば Lee) ことで、そのことを意識し市民住所録類から中国人及び中国系施設として抽出する際の原則を次のように定めた。すなわち、1) カンパニー名に冠された人名の姓が「一覧」に含まれ、名 (first name) も中国系と判断されたもの、2) カンパニー名に冠された人名のうち姓が「一覧」に含まれ、名が欧米系の場合、マネージャーの姓名が中国系と判断されるもの、3) China, Chinese, Shanghai, Canton, Mandarinなどがつくカンパニー名で、マネージャーまたは従業員が中国人であると判断されるもの、4) 中国人と判断される個人が働いている雇用先で、カンパニー名に

アメリカの地名などがついているが、マネージャーの姓名が中国系で、扱う業種などからも中国系であると判断されるもの、の4通りを中国系施設と判断した。このようなやや煩雑とも思える基準を設定したのは、中国系施設を完全に網羅するより、非中国系施設を誤って中国系施設として扱ってしまう危険を避ける方が、中国系施設の分布パターンを検討する上でより重要であると考えたためである。

具体的な作業としては、上記のような方法で判断して抽出した中国系営業施設・コミュニティ施設の住所リストを作り、さらに1905年及び1920年の大縮尺不動産地図 (Baist's Real Estate Atlas of Survey of Seattle, 1905, Kroll's Atlas of Seattle, 1920) 記載の番地を参照して、個々の施設の位置を示す地図を可能かつ必要と思われる年次につき作成した。以下、市民名簿の分析結果や作成した分布図を解釈しつつ、文献からの情報をまじえてシアトルにおける中国人社会の変容とチャイナタウンの生成・変容過程を見ていこう。

II. 中国人の登場と最初のチャイナタウン

アメリカ太平洋岸北西部 (Pacific Northwest) に中国人移民が最初に登場したのは、1850年代後半のこととされており、彼らはカリフォルニアでの鉱山ブームが一段落した後、北西部やブリティッシュ・コロニアの新しい鉱山開発の可能性に賭けて移動してきた人々であった¹⁴⁾。シアトルにおける最初の中国人の記録はやや不確実ではあるが、1860年にシアトルに着き、その後ワ・チョン商会 (The Wa Chong Company, 華昌) を興したチン・チュン・ホック (Chin Chun Hock) であるとされる¹⁵⁾。1870年までには、北西部における中国人人口は234人を数えるにいたったが、シアトルにはわずしか居住していなかった。彼らは、大部分東部ワシントンで金鉱を探すが、ポートランドとピュージェッ

ト・サウンド地域及びシアトルあるいはタコマとカスケード山脈の東とを結ぶ鉄道建設工事労働に携わっていた¹⁶⁾。しかし、シアトルの中国人人口はすぐ増加し始め、1873年には2,000人の市人口中、約100人が中国人であったという¹⁷⁾。1876年までには市人口3,400人に対して中国人約250人となり、さらに300人ほどの中国人がシアトルを出たり入ったりしていた模様である。

シアトルの中国人社会は後述するように1886年2月の反中国人暴動 (Anti-Chinese riots) から1889年のシアトル大火の後まで著しくその機能を低下させたが、この暴動前の1870年代から1880年代前半にかけての時期がシアトルにおける中国人コミュニティの生成時期と言える。この初期の定住期において彼らは市内のどこに住んでいたのだろうか。諸文献によれば、当時の中国人居住区 (Chinese quarters) が現在のIDの西側、後にパイオニア・スクエアと呼ばれる地域にあったことは間違いない。チンらによれば、南北に走る街路のコマーシャル通り (Commercial St., 後の First Ave.S.) とオクシデンタル街南 (Occidental Ave.S.), 東西に走る街路の南ワシントン通りと南メイン通り (S. Main St.) が交差するあたり、特に商店の裏通りが、居住地の中心であったという¹⁸⁾。この界限には、中国系の営業施設も立地した。シアトルにおける最初の中国系ビジネスは、チェン・チョン (Chen Cheong, 陳昌¹⁹⁾) が1867年に創設した葉巻製造工場で、これはワシントン準州における葉巻ビジネスの嚆矢となったという²⁰⁾。また、その1年後の1868年には、前述したチン・チュン・ホックがイエスラー製材所のすぐ南、ミル通り (Mill St., 後のイエスラー道 Yesler Way) の麓 (海岸沿い) にワ・チョン (華昌) 商会を開いた。なお、利用し得るもっとも古い営業者住所録である『ピュージェット・サウンド営業者住所録1872年版』にはシアトル市内で152

のビジネスがリストアップされ、そのうちの2軒が中国系営業施設であったことが判明する²¹⁾。1876年の営業者住所録では、中国系営業施設が11軒、そのうち3軒は食品店 (グロサリー)、9軒は洗濯屋であり、1879年住所録では、総数22軒に増加、うちレストラン3、食品店2、洗濯屋13であった²²⁾。特に洗濯屋の数の多さは、この頃急速に中国系の洗濯業が展開・定着したことを物語っている。これら営業施設の位置を見ると、ほとんどが南ワシントン通り、南メイン通りの三番街南より海岸寄りの区域にあり、1860年代よりやや東に拡大したが、なお狭い範囲に集中していたことが判明する。なお、ワ・チョン商会は、1876年の少し前には三番街と南ワシントン通りのコーナーにレンガ造りのビルを建てて移動してきた。これをきっかけに中国人居住地区は、コマーシャル通りーミル通り地区から南ワシントン通り (二番街南～三番街南) に移動してきたとチンらは見ている²³⁾。

この南ワシントン通りあたりを中心とした当時の中国人の集中居住地区は、決して快適な地区ではなかったようである。これに関して、チンらの記述を見てみよう²⁴⁾；

人々が好んで住むシアトルの7つの丘に比べると、中国人居住区は望ましくない占有地域であった。それは、北側でドヤ街 (Skid Road) とおが屑工場に直接接し、商店や倉庫と混在し、西は水際に接していた。これらの有害で限定された環境のなかで、中国人居住区は中国人と優勢な白人コミュニティとの態度と認識の相互作用によって影響されたゲッターの性格を帯びていた。それは、ある種の移民集落には特徴的だが、中国人が一つの限定された地域に集中することで自身を好んで隔離していたということである。社会学者のユアン (D.Y. Yuan) は、この局地化過程をシアトルの社会・政治的メインストリームへの現

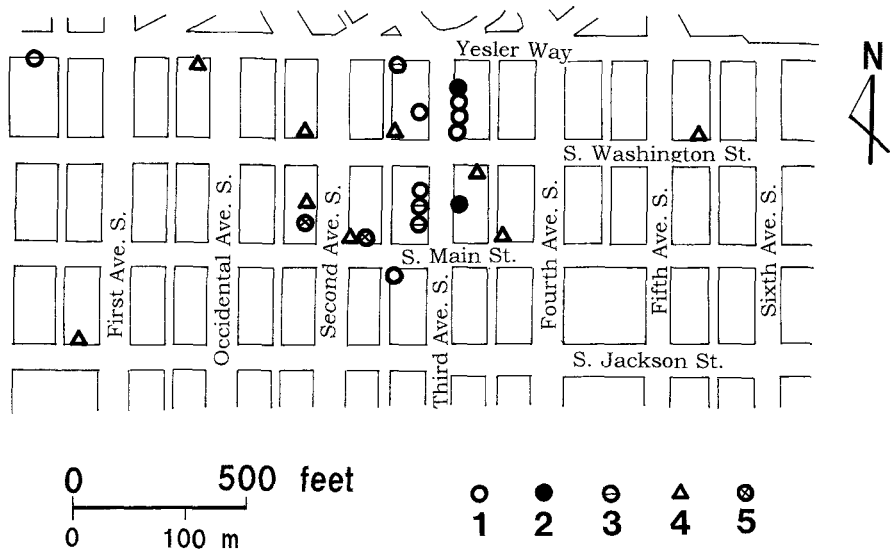


図2 中国系施設の分布 (1885年)

1: 雑貨店 2: レストラン 3: その他の小売店舗 4: 洗濯屋 5: その他の営業施設
 密集域の施設の一部は、位置をずらして表示した (以下の図も同様)。

実的参加を不可能にする言語的障壁及びその他の社会・文化的差異のような非随意的要因を通しての自由意志によるセグリゲーションとして説明した。一方、人種的フロンティアにおける彼らの「黄色人性」、背の低さ、そして彼らの従属性は彼らを差別と攻撃的たらしめた。適応の過程を経て中国人集団は大目には見られたが受容されはしなかった。彼らは「その場所に留ま」らざるを得なかった。

先行研究の諸文献の記述から判断する限り、このシアトルにおける反中国人暴動(1886年)前の中国人居住区がチャイナタウンと呼べるかどうかは微妙である。初期定住期のシアトル中国人社会を詳しく検討したチンらは、この初期のコミュニティを「居住-商業コミュニティ」と表現し²⁵⁾、チャイナタウンという言葉は使っていない。一方、ヒル

デブランドは、チンらの著作を引用する形でワシントン通りに施設が移動していった1870年代後半からをシアトルのオリジナルなチャイナタウンの形成と見ているようである²⁶⁾。しかし、ヒルデブランドが引用したチンらの著作の部分はヒルブランドも記しているように1963年出版の他の著作からの引用であり、チンら自身の説明においてはチャイナタウンという言葉に注意深く避けようとしているように思われる。1973年著作の後段では、「シアトルの最初のチャイナタウンの誕生」は1889年大火後であったとしている²⁷⁾ ことも、このことを裏付けていよう。なお、リーもシアトルにおける中国人の歴史を、1860~1870年「中国人の登場期」、1870~1889年「滞留者の時代」、1889~1925年「チャイナタウンの生成」(の時代)として概括している²⁸⁾。しかし、暴動前において、この中国人の居住区がどの程度商業・業務地区としての

表1 シアトルにおける中国系営業施設・コミュニティ施設の構成とその変化

	1885年		1893年		1900年		1910年		1916年	
	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外
雑貨店 ¹⁾	6		3	2	5	2	15	4	35	4
食品店(グロサリー)	2		2		4			1	3	
レストラン・カフェ	2		1				5	10	8	4
薬(漢方薬)					1				5	
その他の小売り	2		2			1	2	2	3	1
洗濯屋	9	2	5	12	7	7	2	12		15
風呂屋・理髪					1		1			
医者	2									
保険						1	1	1		2
運輸・自動車関連									1	1
出版										
ホテル									1	
その他のサービス業			2			1		3		3
テーラー・製造業			2	1	4	4	3	1	3	2
内容不明営業			2					1		1
コミュニティ施設					1		3		2	2
合計	23	2	19	15	23	16	32	35	61	35

内：チャイナタウン域内、外：チャイナタウン域外

1) いわゆる general merchandise store (輸出入商を含む)

資料：Seattle City and King County Directory, 1885-86 (McIsaac & Co.)

Polk's Seattle City Directory, 1893, 1900, 1910, 1916

施設数

実質を有していたか、あるいはいなかったかという点については、いずれの文献も資料を提示して実証的に明らかにしてはいない。そこで、上述した1885年の状況を示す住所録から中国系施設を抽出した結果を見てみよう。

図2は、マッキザーク社の『シアトル市・キング郡住所録』の1885-86年版²⁹⁾を基礎資料として筆者が作成した中国系営業施設の分布を示す地図である。反中国人暴動以前、1885年の中国人集中地区の状況を示しているものと解される。図に見るように、中国系営業施設は、二番街南～四番街南 (Fourth Ave. S.)、イエスラー道～南メイン通りの地域に少なくとも20ほどの施設がある程度集中して立地していたことが窺われる。その中心は南ワシントン通りというより、むしろ三番街南に面した施設が多かったことも注目される。業種構成を見ると、洗濯屋と雑貨店 (general merchandise store) が多く、レストランや食品店もそれぞれ2軒ずつ在った

(表1)。このうち三番街南に面している施設は雑貨店、レストラン、食品店であり、洗濯屋は周辺部に立地していた。1879年時に比して後のチャイナタウンの中心的業種となる雑貨店が姿を現しており、状況から見て、全体にやや分散気味ではあるが、反中国人暴動前の1880年代前半のシアトルにおいて、「最初のチャイナタウン」と言ってよい地区がすでに形成されていたと判断してよいのではなかろうか。そのチャイナタウンは三番街南を軸としたものであり、後に述べる南ワシントン通り中心のチャイナタウンとはやや立地傾向が異なっていた。なお、この時点ではチャイナタウン域の外 (図2の範囲外) には、ほとんど中国系営業施設の立地は見られなかった (表1)。

Ⅲ. 反中国人暴動 (1886年) とチャイナタウン

前述したように、シアトルの中国人社会と

その居住地域に大きな影響を与えたのは1886年2月のいわゆる「シアトル反中国人暴動」である。この暴動は決して偶発的な出来事ではなく、中国人移民の登場以来19世紀のアメリカ西海岸地域、特に北西部に底流として醸成されてきた中国人への偏見と敵意が集約して表れた現象であった。すでにワシントン準州は、1864年には中国人一人あたりに年間24ドルの税を課している³⁰⁾。これは明らかに中国人のこれ以上の流入を阻止する試みであったが、1882年の「中国人移民排斥法」まで中国人移民の到来は続いた。

流入した中国人移民への敵意は、1883年ころから急速に高まる³¹⁾。「中国人問題」が多くの集会で語られ、シアトルやタコマでは大規模な反中国人デモが行われた。そして、いくつかの中国人への直接的な暴力事件が、1885年に勃発する。皮切りは、1885年9月4日ワイオミング州ロックスプリング (Rock Spring) の炭鉱で起こった事件で、暴徒によって500人も中国人労働者が炭鉱から追い出され、そのうちの11人が殺された。中国人への暴行はワシントン準州にも飛び火し、その3日後の9月7日には、スコークヴァレー (Squak Valley, 後のIssaquah Valley) のホップ農園の中国人キャンプが襲われ、6人の中国人が死傷、翌日中国人たちはこの地を去った。また、9月11日にはコールクリーク (Coal Creek) の炭鉱でも襲撃があり、中国人居住区が焼かれた。

こうした反中国人の動きは、シアトルやタコマのような都市ではより組織的なものとなった。シアトルでは、物理的に中国人の除去を狙うグループと合法的手段でそれを図るグループとが反中国人運動を構成した³²⁾。前者は、労働騎士団 (The Knights of Labor) に率いられ、主として白人の労働者階級から構成される人々である。後者は、市内の富裕な市民や市の役人が主であった。1885年9月28日、急進的グループはシアトルで会議 (「反

中国人会議 Anti-Chinese Congress) を開き、中国人たちは同年11月1日までに西ワシントン而去らなければならないという決議を採択した³³⁾。その後、11月には大規模な反中国人デモがあり、準州の知事が連邦軍の出動を要請するなど事態の緊迫度が増していったのである。

1886年2月7日、蒸気船「太平洋の女王」号 (Queen of the Pacific) はサンフランシスコへの航海のため港に待機していた³⁴⁾。同日11時ごろ、反中国人グループ急進派は集会の後、中国人居住区に侵入、中国人たちおよそ350人を強制的にワゴンに乗せ、蒸気船に乗せてシアトルから追い払うため南メイン通りの足下にあるドックに連れてきた。蒸気船の船長は運賃なしの乗船を拒否、翌日までに反中国人グループは188人分の運賃を集め、8人が自分で払って、計196人の中国人がシアトルを去った。残りの中国人は居住区に戻ったが、護衛と群集との間に発砲沙汰もあった模様である。2月14日には、さらに110人の中国人が蒸気船に乗り、残りの人々も去ることが期待された。

この暴動の直後、どの位の中国人がシアトルに残ったかははっきりしないが、洗濯屋を営む人々や家内労働者などほんの少数の人々は残ったという³⁵⁾。この時期のチャイナタウンがどのような状況であったのか、どの程度の中国系ビジネスが活動を保っていたのかなどの点について、文献記載は管見の限りほとんどない。そこで、暴動後1年を経た1887年発行の住所録³⁶⁾ から中国系営業施設を抽出して見ると、施設数が計16、うち15が南ワシントン通り、南メイン通りと三番街南の交差するあたりの以前のチャイナタウン域に立地していることが判明する。このことは、暴動前よりかなり中国人の営業活動が低下したことは間違いないものの、チャイナタウンが暴動後にすぐ消失したわけではないことを示している。

IV. 大火後の復興と「南ワシントン通り チャイナタウン」の形成

1889年6月6日、マディソン通り近くの一
番街 (First Ave.) にある一つの商店の地下
で火事が発生し、またたくまにダウンタウン
に広まった。火災は一晚中続き、30ブロック
以上、約60エーカーを焼き尽くし、シアトル
のダウンタウンは灰塵に帰した³⁷⁾。これ
が、いわゆる「シアトル大火」である。

しかし、このシアトル大火は皮肉にも
チャイナタウン再建の大きなきっかけと
なった³⁸⁾。復興のための建物再建や道路の舗
装などに多くの労働力が必要となったことが
中国人労働者をシアトルに再び惹きつける要
因となったのである。1890年センサスを見る
と、シアトル市人口43,387のうち、中国人は
359人となり、反中国人暴動前の水準を回復
したことが分かる。この市内中国人人口は
1900年には438人にまで増えたが、シアトル
市の人口と経済の急速な増大に比すれば、中
国系コミュニティの成長は遅々としていたと
言えよう。ワシントン州の中国人は州内に広
く分散していて、その最大の集積地は水産物
缶詰産業が彼らの労働を必要としたワットコ
ム郡 (Whatcom County) であった³⁹⁾。中国人
に対する反感はワシントン州内の一部では
強く残り、例えばタコマではチャイナタウ
ンは再建されず、州東部のスネークリバー
(Snake River) では31人の中国人鉾夫が虐殺
されるなどの事件があったが、シアトルに
関する限り成長する東洋貿易と労働力需要
の増大がそれをカバーしたと言えよう⁴⁰⁾。

回復した中国人人口の主な居住地域は二番
街南と南ワシントン通りあたり、暴動前とほ
ぼ同じ境界であり、ここがシアトルの「最初
のチャイナタウン」になったとチンらの著作
では認識している⁴¹⁾。しかし、営業施設の数
や詳細な分布はこれまでの文献で明らかにさ
れていない。チンらの記載では、大火後すぐ

に富裕な中国人商人チン・ギー・ヒー (Chin
Gee Hee, 陳宣禧) が二番街とメイン通りの
北東のコーナーに煉瓦造りのビルを建てたと
いう⁴²⁾ が、その他の中国系営業施設の多くは
南ワシントン通りにあったようで、著作には
いつの年次の状態を示すかはっきりしないが
「シアトルのオリジナル・チャイナタウンの道
路地図」と題して、同通りの二番街南から三
番街南の間に北側8、南側4、計12の商店
(そのほとんどが中国系と推察される) が立
地している様子を示した地図が掲載されてい
る⁴³⁾。しかし、この地図からは中国系営業施
設が南ワシントン通り以外にいくつくらい
あったのか、南ワシントン通りにどの程度集
中していたのか、すなわちチャイナタウンの
空間的構造の全容は分からない。そこで、こ
こでは前述したように『ポーク社シアトル市
民住所録』からいくつかの年次について中国
系営業施設を抽出した結果を見てみよう。

まず、1890年発行のポーク社住所録におい
ては、中国系と目される施設は13であり、そ
のうち洗濯屋9、日本雑貨 (Japanese Bazaar)
3、葉巻・タバコ製造・販売1となる。その
立地を見ると多くがダウンタウンの海岸沿い
北部であり、暴動前に成立していた「最初の
チャイナタウン」域またはその近傍には2軒
しかない。このことは、暴動後ある程度時間
がたった段階でチャイナタウンはほとんど消
失し、大火後1年のこの時期においてまだ復
興していなかったことを示している。一方、
1893年の住所録からは、計34の中国系施設が
抽出される。このうち、19軒がもとのチャイ
ナタウン域か、その近くに立地し、業種も雜
貨店、食品店、レストラン、テラーなどを
含んでいる (表1) ことから、チャイナタウ
ンがある程度もとに近い水準で復興したと言
えよう。しかし、その立地を地図化して見る
と五番街南 (Fifth Avenue S.) 沿い、南ワシ
ントン通りと南メイン通り近くが多く、暴動
前のチャイナタウンとは少しずれた地域に再

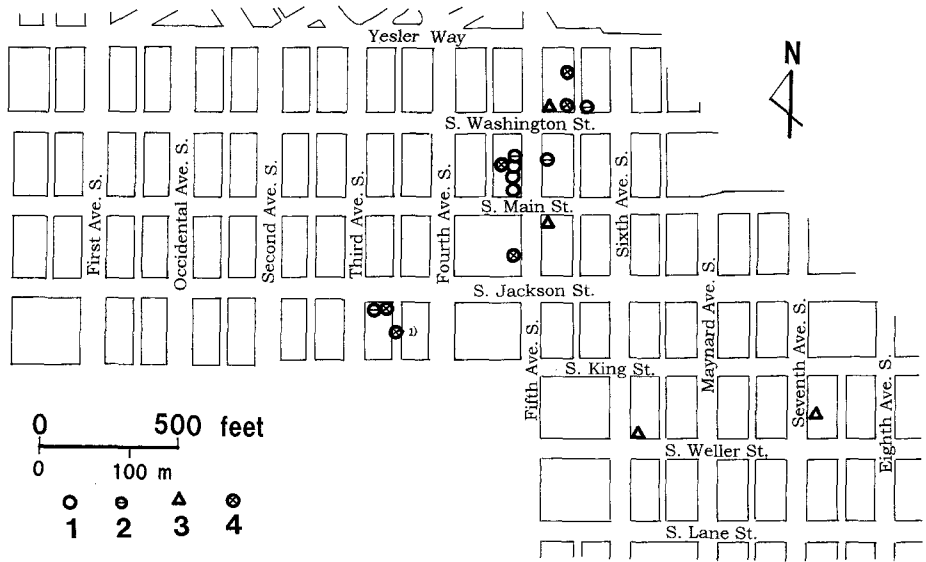


図3 中国系施設の分布 (1893年)

1: 雑貨店 2: その他の小売店舗 3: 洗濯屋 4: その他の営業施設

図中 1) アレイのどちら側にあるか不明

(表1に示したチャイナタウン域内19施設中、図の範囲外1、位置詳細不明1を除く17施設を图示)

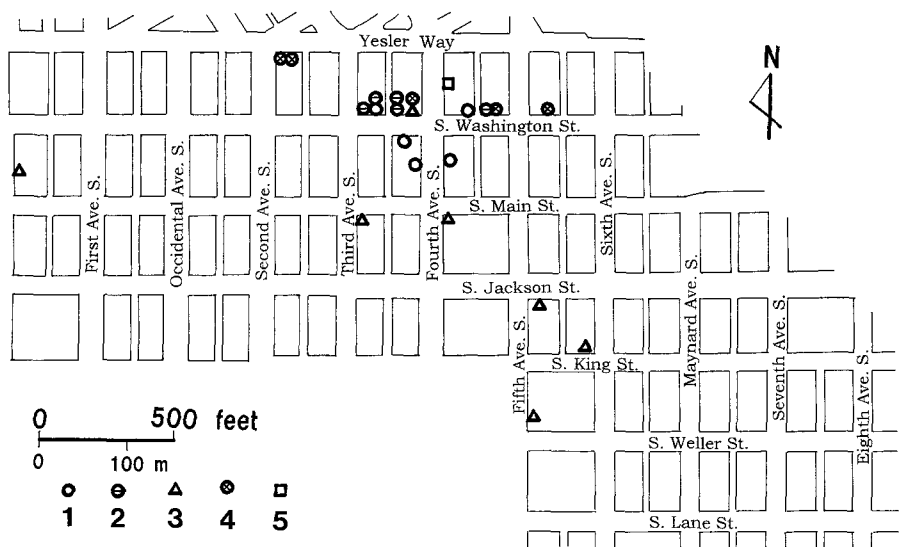


図4 中国系施設の分布 (1900年)

1: 雑貨店 2: その他の小売店舗 3: 洗濯屋
4: その他の営業施設 5: コミュニティ施設

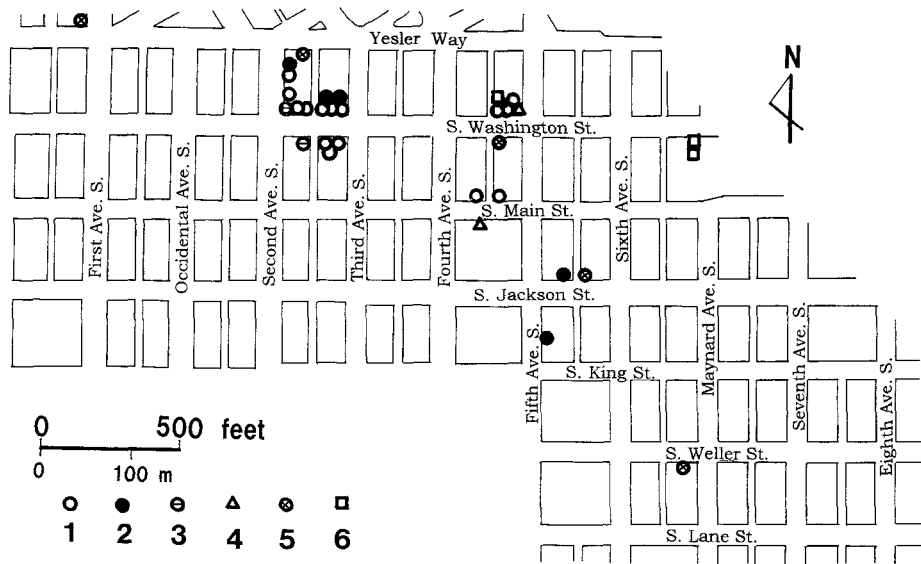


図5 中国系施設の分布 (1910年)

- 1: 雑貨店 2: レストラン 3: その他の小売店舗
 4: 洗濯屋 5: その他の営業施設 6: コミュニティ施設

形成されたこと、また、チンらの言う南ワシントン通り中心の「オリジナル・チャイナタウン」ともやや立地傾向が異なっていたことが判明する (図3)。

しかし、1897年発行のポーク社住所録から抽出した結果を見ると、中国系営業施設計34、このうち21がチャイナタウン域かその近傍に立地し、しかも少なくとも12が南ワシントン通りに面していたと推察される。すなわち、「南ワシントン通りチャイナタウン」は、大火後すぐにはではなく1890年代の後半になって形成されてきたと見てよいであろう。1900年住所録からの結果においても立地傾向はほぼ同じで、南ワシントン通りに少なくとも13軒の中国系営業施設が集中立地していた (図4)。しかし、両年次ともその立地は通りの北側に著しく偏っており、やや変則的な片側商店街であったことが窺われる。また、このワシントン通りで最も集中しているのは三番街南から四番街南の間であり、チンらの地

図で示された集中地区である二番街南から三番街南の間にはほとんど立地していない。なお、中国系施設の総数はチャイナタウン域 (地図範囲内) で1897年21、1900年23と暴動前の数とほぼ同じであるが、域外 (地図範囲外) に1897年13、1900年16の施設があり、中国系施設全体としては数も増え、かつ地域的に分散していったことが判明する (表1)。

図5は、1910年の『ポーク社市民住所録』からの作業を地図化したものである。図を見るに、中国系施設のワシントン通りへの集中は変わらないとしても、分布の細部は1900年からかなりの変化が見える。施設が最も集中して立地しているのは二番街南から三番街南の間であり、北側に9施設、南側にも4施設立地している。この状態は、前述したチンらの地図に示された状態に近い。また、ワシントン通り北側には四番街南と五番街南の間にも小集積が見られる。一方、三番街南と四番街南の間の南ワシントン通りには中国系施設

は見当たらず、このことは1900年から1910年の間に変化があったことを意味するが、その詳細はいまのところ不明である。ただ、1905年の大縮尺不動産地図 (Baist's Real Estate Atlas of Surveys of Seattle, 1905) では当該ブロックがすでに教会と空き地になっているので、上述の変化は1905年以前にこの範囲の商業用建物が撤去され、土地利用が変化したことによると推測される。施設数を見るとチャイナタウン域には32施設が立地し、チャイナタウンの機能がより強化されたことが窺われる。また、このなかには3つのコミュニティ施設 (バプティスト教会、英語学校、廟) が含まれることも、中国系コミュニティが成長した証と言えよう。この時期、特筆すべきはチャイナタウンの外の施設数が35とチャイナタウン域を上回っていることで、シアトル市全体としては施設立地の分散がより進んだことを示している。

この南ワシントン通り中心のチャイナタウンは、どのような機能を発揮していたのであろうか。チャイナタウン域で最も主要な業種類型は、本稿で「雑貨店」と記述したもので、これは住所録で general merchandise store と表現されたものを中心に中国輸出入商などを加えたものである。これは、中国人が経営する総合商会で、雑貨、食品、中国等東洋輸入品など中国人の移民労働者が必要とする品を雑多に扱う他、下宿屋、金融、労働斡旋などの機能を兼ねるものもあり、また中国人の相互のコミュニケーションに欠かせない空間を提供していた⁴⁶⁾。他には、レストランを除くと専門化された商店やサービス業オフィスがほとんどないのも特色で、これはこれらの機能を雑貨店が代替していたためであろう。なお、チャイナタウン域外ではレストランと洗濯屋が圧倒的に多く (表1)、ホスト社会が中国人に期待する機能を提供していたと見ることができる。このうち、レストランは中国人のもつ文化的資源をホスト社会のなか

で最も有効に利用できるものであり、洗濯業はその労働集約的な性格と初期投資の低さが新来の移民である中国人にも数少ないホスト社会志向の起業機会の一つを与えたと言えよう⁴⁵⁾。

V. 中国系施設の移動と「南キング通りチャイナタウン」の形成

D.チンとA.チンによる著作では、南キング通り中心のチャイナタウン (現在までのチャイナタウン) の形成は、1909年のグーン・ディップ (Goon Dip) によるミルウォーキー・ホテルの建設から始まったとされている⁴⁶⁾。しかし、D.チン単著の新しい著作では、この南キング通り界限における最初の中国人所有の建物は1910年建築のヒップ・シン・トン (Hip Sing Ton) ビルであり、同じ年に南キング通り (七番街南Seventh Ave. S.～八番街南Eighth Ave. S.) におけるさらに2つのビル建設がグーン・ディップ率いるコン・イック (Kong Yick) 投資会社によって進められ、ここに進出した2つの有力な中国系商会が南キング通りにおける最初の中国系ビジネスであったという⁴⁷⁾。同書によれば、ミルウォーキー・ホテルの建設は1911年であり、当時の粋を凝らした建物であった。チンはこうした記述の根拠 (資料) を示していないが、『ポーク社市民住所録』ではミルウォーキー・ホテルが1912年版から (Hotel Milwaukeeの名で) 登場していることから見て、新しい著作の記述の信用性が高いと判断される。なお、筆者の作業結果においても、1910年段階では五番街南にレストランが、また南ウェラー通り (S. Weller St.) にテーラーがそれぞれ1軒ずつ立地しているのみで、南キング通りにはまだ中国系施設の進出は見られない (図5)。

このように1911年以降、南キング通りへの中国系施設の進出が始まり、チャイナタウンの移動と新しいチャイナタウンの形成が促

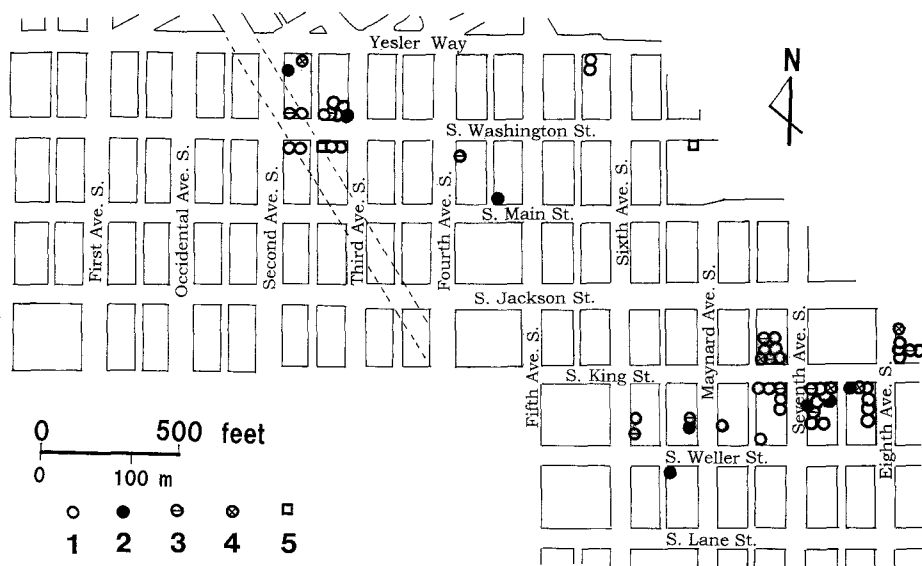


図6 中国系施設の分布 (1916年)

- 1: 雑貨店 2: レストラン 3: その他の小売店舗
 4: その他の営業施設 5: コミュニティ施設
 破線: 二番街延長 (Second Ave. Extension)

進されていったと解釈されるが、この移動にはどのような要因と背景があったのであろうか。この点に関して先行文献では必ずしもはっきりした指摘がないが、一つ考えられることは古いチャイナタウン域である南ワシントン通りの海岸寄りの地区の過密化と建物の老朽化である。この区域はシアトルでもっとも開発が古い地区で、商業・業務地区が北方向に拡大するなかで移動労働者の滞留地としての性格が強くなり、後にドヤ街の代名詞となった「スキッドロード」の名で呼ばれるようになった。ところでこの地域からの移動の方向性となると限定されている。北は新しい都心域であり、南は鉄道用地、西はすぐウォーターフロントで、唯一可能な方向は東寄りの山の手に向かうことであった⁴⁸⁾。また、この東への移動を可能にしたフィジカルな条件として、ファーストヒルの削平 (regrade) がある。すなわち、移動

先となった南キング通りの現チャイナタウン域は19世紀には急傾斜のファーストヒルから南の潮間帯低地へと移行するところにあり、20世紀初めの「ジャクソン通り削平プロジェクト」により傾斜が減じ、かつ埋め立てにより南方の土地が開けた。このことが、有力な中国人商人をして、彼らの新たな活動場所としてこの地を選ばせたのではなかろうか。

図6は、1916年の『ポーク社市民住所録』から中国系施設を抽出した結果である。南キング通り沿いを中心に、西は六番街南 (Sixth Ave. S.)、東は八番街南までの区域に40ほどの中国系営業施設の集積が形成され、「南キング通りチャイナタウン」が成立した状況が示される。しかし、この段階では古い南ワシントン通りのチャイナタウンも完全に消滅したわけではなく、まだ15軒ほどの営業施設が立地しており、新旧のチャイナタウンが競合していたことも判明する。なお、チンらは

1920年までに旧チャイナタウンのほとんどすべての商店が新しいチャイナタウンに移動したと述べている⁴⁹⁾。しかし、1930年のポーク社住所録から抽出した筆者の作業結果では、1920年代貫通の二番街延長 (Second Avenue Extension) 部分 (図6, 参照) に直接該当した施設は消失したものの、なお11軒ほどの中国系商店が古いチャイナタウン域に残存しており、新旧チャイナタウンの競合は戦前期においてかなり遅くまで残ったことが示される。

VI. おわりに

チンなどによる既存文献において共通して描かれるシアトルの初期チャイナタウンないし中国人集中居住地区に関する認識は以下のようにまとめられる。1) 反中国人暴動の前の1860年代末～1886年までの期間、最初の中国人集中居住地区が形成され、その位置は現在のパイオニア・スクエア界隈であった。営業施設も数軒立地したが、チンらはチャイナタウンが形成されたという認識は特に示していない。2) 1889年シアトル大火後、中国人居住区が復活し、営業施設も増加、最初のチャイナタウンが特に南ワシントン通り沿いに形成された。3) 1910年前後から現在のチャイナタウンにつながる新チャイナタウンの形成が始まり、1920年頃までに中国系営業施設の旧チャイナタウンへの移行が完了した。なお、これら初期チャイナタウンの正確な位置や営業施設構成の詳細については、地図による復原表現がごく概略的なものしかなかったこともあり、十分に解明されていない。

筆者が市民住所録類から中国系施設を抽出して地図化した結果から得た知見のうち、特に従来の見解と異なる点、あるいは新たに浮かび上がってきた点をまとめると次のようになる。1) 1885年段階において現在のパイオニアスクエア域に少なくとも23軒の中国系

営業施設が立地し、全体としてやや分散気味ながらも三番街南を中心とした集積を形成していた。すなわち、反中国人暴動 (1886年2月) 以前に最初のチャイナタウン的形態がすでに形成されていたと言ってよいのではなかろうか。2) 反中国人暴動を経てシアトル大火 (1889年) 後の「南ワシントン通りチャイナタウン」の形成は、大火後すぐというより1890年代後半になってからであり、その形態は通りの北側に著しく偏したものであった。3) 1910年にはワシントン通り沿い二番街南～三番街南、四番街南～五番街南の間に施設が集中して、このワシントン通りチャイナタウンが2つに分裂した形になったことが窺える他、この段階では現在のチャイナタウン域である南キング通り域における施設立地はほとんどなかった。4) 南キング通りへの中国系施設の進出は1911年以降であり、チャイナタウンの中心は1910年代後半には南キング通りへ移ったが、旧チャイナタウン域にもかなりの中国系施設が残り、新旧チャイナタウンの競合が戦前期遅くまで、少なくとも1930年の後までは続いた。5) チャイナタウン域外の中国系施設の立地を見ると、1886年以前は僅少であったが、1900年段階ではイエスラー道以北のダウントウン域にも進出し、1910年段階ではチャイナタウン域外にチャイナタウン域にも比肩する数の中国系施設が立地していたことが判明する。なお、中国系営業施設の構成を見ると、チャイナタウン域では中国輸入雑貨・食品販売、労働斡旋など中国系社会に向けて多様な機能を果たす「雑貨店」が中心であり、域外ではホスト社会志向型と思われる中国食レストランと洗濯屋が多かった。

シアトルにおける初期チャイナタウンとそれを支える中国系エスニック経済及び移民エスニック社会の詳細な実態、また南キング通りチャイナタウンの形成とそこへの南ワシントン通りチャイナタウンからの移行過程に関

しては、文献的資料の精査⁵⁰⁾を含めてさらにインテンシブな検討が必要となろう。

(岩手大学)

〔付記〕

本研究の遂行にあたっては、ウィングルーク・アジア系博物館のRon Chew氏、Robert S. Fisher氏から貴重なご助言、資料の提供をいただいた。シアトル在住のワシントン大学名誉教授George H. Kakiuchi先生ご夫妻には現地滞在の度に暖かいご支援・ご協力を賜った。また、英文要旨はハワイ大学地理学教室Mary G. McDonald先生に校閲していただいた。以上の方々に、心から御礼申し上げたい。本研究の現地調査には、平成14～16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)、研究代表者:杉浦直、課題番号14580077)及び平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(A)、研究代表者:山下清海、課題番号18202027)を使用した。なお、本稿は2005年6月に日本学術振興会に提出した科研費研究成果報告書『アメリカ西海岸におけるアジア系エスニック都市空間の構造と機能』第3章(pp.41-56)の内容に、2005年、2006年の現地調査の結果を加えて、大幅に修正・加筆したものである。

〔注〕

- 1) チャイナタウンを厳密に定義することは難しいが、山下は「海外の都市における華人の集中居住地区」「中国文化と現地社会の文化の接触によって生まれた、華人が集中する商業、業務地区」とし、「住宅のほかに、多種多様な店舗、オフィス、工場などから構成されている」と説明している。本稿では、中国系の商業・業務施設(店舗、オフィス)の一定地区への集積を第一要件としてチャイナタウンを考える。山下清海『チャイナタウン—世界に広がる華人ネットワーク—』丸善株式会社出版事業部、2000、3-4頁。
- 2) アメリカに居住する中国人移民及びその子孫のなかには、構造的に同化が進み「中国系人」あるいは「中国系アメリカ人」と称する方がより適切と思われる人々もいるが、本稿では対象時期が古いこともあり便宜的に「中国人」という総称を用いる。
- 3) Chin, D. and Chin, A., *Up Hill: The Settlement and Diffusion of the Chinese in Seattle, Washington*, Shorey Books, Seattle, 1973, 70p.
- 4) ① Chin, D. and Bacho, P., "The History of the International District: Early Chinese Immigration," *The International Examiner*, Oct. 17, 1984, pp.7-10. ② 同, "The Origins of the International District," *ibid.*, Nov.21, 1984, pp.5-8. ③ Chin, D., "The Emergence of a unique Asian American Community," *ibid.*, Dec.19, 1984, pp.7-12.
- 5) Chin, D., *Seattle's International District: The making of a Pan-Asian American Community*, International Examiner Press, Seattle, 2001, 124p.
- 6) この移動時期に関しては必ずしもチンらは明言していないが、文脈の流れから1886年の反中国人暴動以前、おそらく1870年代後半からということが読み取れる。
- 7) Hildebrand, L.B., *Straw Hats, Sandals, and Steel: The Chinese in Washington State, The Washington State American Revolution Bicentennial Commission*, Tacoma, 1977, 97p.
- 8) Takami, D., *Shared Dreams: a History of Asians and Pacific Americans in Washington State*, Washington Centennial Commission, Seattle, 1989.
- 9) 前掲3) p.6.
- 10) Hsu, H.-H., *Passage to Chinatown, Managing the Sense of a Place—Chinatown—International District, Seattle*, MA Thesis (Urban Planning), Univ. of Washington (unpublished), 1987, Figure 5 (p.29).
- 11) 杉浦直「シアトルにおける日系人コミュニティの空間的展開とエスニック・テリトリーの変容」人文地理48-1, 1996, 1-27頁。
- 12) ① *Puget Sound Business Directory and Guide to Washington Territory, 1872*, Muphy & Harned, Olympia, 1872, ② Ward, K. C., *Business Directory of the City of Seattle for the Year 1876*, B. L. Northup, Seattle, 1876, ③ Pitt, R. D., *Directory of the City of Seattle and Vicinity—1879*, Hanford & McClaire, Seattle, 1879,

- ④ *Seattle City and King County Directory, 1885-86*, C. H. McIsaac & Co., Portland, 1885.
- ⑤ *R.L. Polk & Co.'s Puget Sound Directory, 1887*, R. L. Polk & Co., Seattle, 1887.
- 13) Louie, E.W., *Chinese American Names: Tradition and Transition*, McFarland & Co., Jefferson, NC, and London, 1998, Appendix.
- 14) 前掲3) p.2.
- 15) 前掲3) p.5.
- 16) 前掲3) p.4.
- 17) 以下, 前掲4) ① p.8.
- 18) 前掲3) p.5.
- 19) 劉伯驥『美国華僑逸史』黎明文化事業股份有限公司, 1984, 181頁による。
- 20) 以下, 前掲4) ① p.7.
- 21) 前掲12) ①。なお, この資料では, チェン・チヨン経営の葉巻工場と思われるビジネスの広告が掲載されているが, それによると葉巻, 紙巻きタバコ, 食品, 中国雑貨の卸と小売を兼ねており, 総合商会的なものであったことが窺われる。
- 22) 前掲12) ②及び③。
- 23) 前掲4) ① p.8, 及び前掲5) p.17.
- 24) 前掲3) p.7.
- 25) 前掲3) p.7, 及び前掲5) p.17.
- 26) 前掲7) pp.24-25.
- 27) 前掲3) p.17.
- 28) Lee, D. W., "Sojourners, Immigrants, and Ethnics: The SAGA of the Chinese in Seattle", *Annals of the Chinese Historical Society of the Pacific Northwest*, 1984, Bellingham, WA, pp.51-58.
- 29) 前掲12) ④。
- 30) Wilcox, W. P., "Anti-Chinese Riots in Washington", *Washington Historical Quarterly*, 20-1, 1929, pp.213-222 (p.204, 参照)。
- 31) 以下, 前掲30) pp.204-208.
- 32) 以下, 前掲4) ① pp.9-10, 及び前掲30) pp.206-208.
- 33) 前掲30) p.206.
- 34) 以下, 前掲30) pp. 206-211, 前掲4) ① p.10, 及び Kinnear, G., *Anti-Chinese Riots at Seattle, WN., February 8th, 1886*, Twenty Fifth Anniversary of Riots, Seattle, Washington. pp.5-8.
- 35) 前掲4) ① p.10.
- 36) 前掲12) ⑤。
- 37) Sale, R., *Seattle: Past and Present*, Univ. of Washington Press, Seattle and London, 1976, p.50.
- 38) 以下, 前掲3) p.17.
- 39) 前掲4) ② p.7.
- 40) 前掲3) p.17.
- 41) 前掲4) ② p.7.
- 42) 前掲3) p.19, 及び可児弘明他編『華僑・華人辞典』弘文堂, 2002, 322頁及び516頁。
- 43) 前掲3) p.20.
- 44) 前掲3) pp.21-24. なお, 具体的な店舗の構造や形態について記述した資料は少ないが, 1902年に建築許可を申請した南メイン通り416番地のWa Chong Companyの例では, 3階建て煉瓦造りビルで, 1階は店舗, 2, 3階は下宿部屋, 地下に倉庫を有していた模様である。*Seattle (Daily) Times*, 1902年6月1日記事("New Business Block: Wa Chong Company Takes Out Permit for Three-Story Brick Building")
- 45) Ong, P., "Chinese Laundries as an Urban Occupation in Nineteenth Century California", *Annals of the Chinese Historical Society of the Pacific Northwest*, 1983, Seattle, pp.68-85 (p.68, 参照)。
- 46) 前掲3) pp.27-28.
- 47) 前掲5) p.39.
- 48) *Seattle (Daily) Times*, 1906年3月2日記事("Old Chinatown Is To Be Wiped Out").
- 49) 前掲4) ② p.8.
- 50) 本論文で使用した文献資料は基本的に英文で書かれたものであり, 中国語文献に関しては今後の課題としたい。

Formation and Changes of Early Chinatown in Seattle, Washington

SUGIURA Tadashi

This paper attempts to examine the formation and changes of Seattle's early Chinatown from the late nineteenth century to the early twentieth century from the viewpoint of historical geography. According to existing literature on early Chinatown, the following outline of historical processes have been pointed out; 1) The original Chinese sector in the town of Seattle developed in the area of present Pioneer Square close to the Seattle's waterfront in the late 1860's, but no clear recognition of the formation of Chinatown as a business district has been presented. 2) After the anti-Chinese riots in February 1886, the population and activity of Chinese declined rapidly, however after the Great Fire of Seattle in 1889 the Chinese quarter was reconstructed and the number of Chinese businesses increased particularly along South Washington Street establishing the Seattle's first Chinatown. 3) A new Chinatown began to develop in the South King Street area around 1910, and by 1920, nearly all the businesses in the old Chinatown had moved to the new Chinatown area. The exact location of Chinatown and detailed composition of Chinese businesses have not fully made clear mainly because of the lack of adequate mappings of Chinatown.

In this study the author tried to draw more detailed maps, which show the distribution of Chinese businesses for selected years, and to examine their detailed composition, through extracting Chinese businesses from the comprehensive business lists in old city directories using Chinese surnames. The main results of the author's new examining are summarized as follows;

- 1) Before the anti-Chinese riots in 1886, at least 23 Chinese businesses were located in the area called currently Pioneer Square. We may consider this commercial area the original Chinatown in Seattle.
- 2) The reconstruction of Chinatown mainly along S. Washington St. was not just after the Great Fire, but in the late 1890's. The most important category of Chinese business of those days was the general merchandise store which served as a store of various commodities and food-stuffs, an importer of oriental goods, a lodging house, a banking facility, a labor contractor, and a communication center.
- 3) After 1911, main Chinese companies began to move to the lower S. King St. area establishing a new Chinatown, which has continued up to the present. The old Chinatown along S. Washington St., however, had not disappeared with a short period, but remained considerably late in the prewar era.

Key words: Chinatown, Chinese immigrant, Chinese business, Seattle